

加茂米くらぶ

だより

桜の葉もすっかり落ち、道路沿いには色とりどりのコスモスの花が風に揺られ、秋の訪れを感じさせてくれています。

インフルエンザの影響により全国各地でいろいろな行事、イベントが中止になり、市原市においても早々と敬老会が中止に追い込まれてしまいました。加茂地区においても、地区体育祭の中止を決定し体育指導員の皆さんは対応に苦勞されたようでした。主催者側としてインフルエンザの拡散の防止、あるいは、もしかかってしまったらという危機のもと、中止せざるを得なかったことに理解はできるものの本来、健康増進や普段の運動不足解消の場となる屋外での体育祭中止は本末転倒のような気がします。いずれにしろ、一時小学生と中学生にインフルエンザにかかった子が数名いたようですが、(人口密度が低いとはいえ)加茂地区ではその後落着いてきているようで、学級閉鎖もなく安心して活動できるようです。くれぐれも、皆さん方にもご自愛いただきたく思います。

ではつづけて。



さて、F.M市原が開局され、パソコンリテの伝心柱編集長「原地」さんが、高滝湖のポート屋さん情報という勝手なコーナーを設けてくれたおかげで私F.M.アゴにしてみました。

高滝湖周辺の情報提供がメインにならないといけないのに、いつものまにやらべつて講座になつていってしまう。たぶん少ない一部のリスナーからあたりのがあるとかで、私もすくなくらす調子に乗っているのです。今回のべつて話は、以下のべつて話を標準語に直していただきます。

正解者に抽選で加茂の新米10kgを3名様にプレゼントします。応募は八ガキで、宛先は巻末の住所へ、締切りは10月31日消印有効をもって応募ください。当選は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

問1 おっはしる(動物)
問2 せえかち(名詞)
問3 くつちやめ(名詞)
問4 だてんかん(形容詞)
問5 かいのえ(地名)
(「加茂里山通信」)

魚屋の戯言



さんまが美味しい季節の真っ只中になりました。この号が出るのが十月十七日、記事を書いているのが九月の末なのでもしかしてひよとしてやちもさんまの季節の間に合わないかもしれないのが少し気になります。もしずれてしまったら申し訳ありません。

それを覚悟の上でさんまについて書いたのは理由があります。今年にはさんまが大豊漁でした。しかも二百グラムを大きく上回る大型のさんまがたくさん水揚げされています。

さんまが入れられている発泡スチロールの箱に四キロが何尾のさんまが入っているか数字で表示されている事は、前回さんまについて書いた際に説明させて頂きました。通常だと二十尾から二十五尾入りくらいの幾分やせ気味のさんまがほとんどで、二十尾だと大型の部類に入り、稀に十八尾入りのまるまる太り脂がたっぷり入った超大型のさんまも見かける事があります。

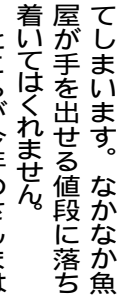
しかし残念ながらこのクワスのさんまは数が少ないだけにどうしても値段が張ってしまいます。なかなか魚屋が手を出せる値段に落ちてはくれませんが、着いてはくれません。

このころのさんまは、違いますが、市場には二十尾入りが大量に並び、十八尾入りの箱も少なくありません。三十年以上上魚屋をやっている私でもこんな光景は初めて目にしました。四キログラムで十八尾と一尾当たり二百二十グラムの計算ですが、実際に量ってみたら二百三十グラムを超えているものも数多く混ざっていました。値段も一尾二百前後と大きくなっています。

これだけ大きいさんまはめったにありません。その身は青いままだに白く輝き、これでもかと言ふくらいにさんま独特の脂肪を蓄えています。立ち上がる煙に程よく燻されたさんまに大根おろしを添え、酢橘を絞って口に放り込めば美味この上なし。日本人に生まれついた幸せをしみじみ感じさせてくれる一品です。十月の半ばはこの号が皆様のお手元に届く頃まで今の状態が続いている事を祈るばかりです。

(鈴木里山通信員)

さんま



加茂伝説

石神 ある家の元旦
衣食足りて礼節を知る。よき時代になったものだ。六半はをすき、つくつくお話する今日この頃...。今は昔のお話ですが私位の年代であつたらしくなても経験なき事だと思われかと思われ方も多かつたと思われれます。戦後食へるものも無く、すいとんが旨い旨いと食へる姿に母はこんな世でなかつたらと涙を流した話を成人になった私に話してくれました。かつて私が小学生の時代で、その頃もあまり豊か小生時代ではなかつたが、暮れになると親父は餅をついて、それを母が手早くのし餅と丸餅。それはこれからお話をする正月用なのであります。

我が家と同居では、あまり他にはない家例があるのです。ここに紹介いたしますのは、三が日の朝のみ行われるしきたりです。まず家の若衆が朝早起きをして、若水を汲み神棚へと、仏壇に上げるそのまは、八つ頭の家で行われる事。そのあと当座では一戸の小さな子芋を三〇個位、醤油味した吸い物にします。里芋は、トコブシの殻に一個ずつ盛り、内の神棚、仏壇として外の神様(東の方様、井戸の神様、農具置場、物置小屋等)に一個ずつあげるのです。それが終ると居間で餅を焼く。つぎあんで、つぎ、里芋のお吸い物に九十九の青海苔をかけた(外房では八八のり)皆で頂きながら三が日の朝を迎えるのです。

皆さんのご家庭では多分お雑煮が圧倒的に多いかと思いますが、いかがなものでしょうか...。いつかまた時代が変わり、こういつきたりも忘れ去られる事なのでしょう。私は私なりにこれは懐石の始まりではないか、と...。

尚、その日の昼と夜は何を食べても構わないです。

【石神 金子美智男】

お正月のお雑煮は各地多種多様の味・形で存在していますが、この石神・金子家の元旦に食するお餅料理は「お雑煮」とは言わないので、雑煮(こつた煮)ではなく、前述したように供物と懐石の趣で厳かな意味を持つ料理であるようにです。さあ、皆さんのご家庭では、

(佐久間里山通信員)



加茂里山通信

平成21年秋号

発行 市原商工会議所
加茂里山通信編集部
発行責任者・編集長 佐久間眞明

10月18日 高瀬神社秋季例大祭

高瀬神社は年間を通して皇室の勲章、国家の隆昌、氏子貴族の多幸をお祈りする為にお祭りを奉仕していますがその中で最も重要なお祭りが秋の例大祭です。

昭和六十二年頃までは十月の中西の日に決まっていた祭礼日は現在、十月の中西の日の前後の日曜日に行われています。(今年は十月十八日)

昭和四十八年頃までは本祭の前日を宵祭(よいま)とその翌日を上祭(あがりま)と分けて三日間行われていました。特に宵祭は社殿で神事の三社(上郷・宮本郷・平蔵郷)の神輿が次々と神社から宮出しをして社殿を三回廻りて宮入りとなり、何十人もの人達が持つ部籠を入り



残りか今の流籠馬といわれています。流籠馬は代々石神の平田家が騎手を務め、馬上から矢を三か所の的に向かって射つていき、その当り外れによって翌年の稲状況を決つてお祭りをします。

昭和三十五年頃までは流籠馬が終りますと赤や黄、紫、緑等の色々な花模様の装束に身を包み、色ヌスキをかけ、馬に跨り両手の綱を離したり、体を捻ったりする妙技を披露しながら疾走する「疾走馬(はやま)」が行われていました。

この行事の時、神輿の担ぎ手達が割符を地面に叩きつけて音を出したり奇声をあげてます。馬をおとす走らせます。それが何頭も走るので騎手も変われば着飾りも違い、色々な妙技で大変盛り上がりだつたそうです。

けんか神輿の伝説
このお祭りの一番重要な行事はやはり神輿渡御(みこり)です。この神輿は昔から「喧嘩神輿」と呼ばれ大変荒々しいものでした。

この神輿渡御の行事は江戸時代中期から始まったものとされ、正徳年中の書物「神事の掟」をみると、祭礼に神輿を出

人と人を繋ぐ神輿

神輿とはその名の通り神様の御分霊を遷し奉安する輿(こし)のことをいいます。

この神輿が氏子区域を巡行することにより神様と人が、人と人々を繋ぎ通して活気を取り戻し、神様もこつた人々の姿を見て喜び、渡御する地域の各家々に御神徳を与えて下さると信じています。

神輿を担ぐ事は、神と人との間をもちろんのこ、人と人との関係をつなぐ行動があります。人と人との関係が希薄になつてきている現代の世の中だからこそ、このようなお祭りが大切なのではないのでしょうか。(佐久間里山通信員)

田んぼ大好き! 里見小

朝から晴天の9月25日(金)待ち待った里見小の稲刈りがやってきました。

例年は5年生が担当するのですが、今年は4年生13名、5年生9名担任の先生に校長先生、教頭先生、教務主任の先生まで参加して賑やかに終わりました。

作業の指導は例年通り田んぼの所有者である仲川さん夫妻にお願いしました。いつも妥協を許さない厳しい指導をされる仲川さんですが、今年は子供達を褒められるシーンが多かつた様です。刈った稲をわらで縛るのも上手で、皆、合格のお褒めでした。「特に今年の子供達は田んぼの作業が大好きな様子だね」と教頭先生は話しておられました。

今年も仲川さんのコンバインが出勤し、作業は1時間程で終了しました。

里見小はいつももち米で、今年は例年に無い豊作。2畝歩程の面積で30kg入りの袋で3袋でプラスアルファの収穫がありました。これは「田植えの時期を少し遅せたのが良かったのでは」と先生方は満腹でした。

獲れたお米は例年通りムシロで天日干し、そして12月5日(土)のマラソン大会にPTAの皆さんの協力で餅つきをして会食するそうです。もちろん仲川さん達も招待されるそうです。こんな微笑ましい関係が長年続いている里見小です。(佐久間里山通信員)

白鳥小は大豊作!

白鳥小の稲刈りは9月9日に行われました。当初は9月3日の予定でしたが、夏の日照不足がたり遅れてしまいました。作業は全校生徒と保護者を含めたボランティア14名が加わり、見る見る刈り取られて行きました。やはり「収穫の喜び」でしょうか、田植えの時より明らかにテンションが高いようです。トラクターなどは古宮武勇さん、もみすり機は秋葉さんが引き受けて下さりバックアップ体制は万全です。

白鳥小は、年間の田んぼの管理を農業高等学校の山下先生の指導により、全て学校内で行っています。この数年はインシシ対策の防護柵を職員の手で設置したおかげで被害は全く無いそうです。そんな皆の愛情で育ったお米は7畝歩の田んぼで6俵もの収穫がありました。

そしてお待ちかね、精米されたお米は11月14日(土)の「白鳥子まつり」でカレライスを作り、皆で会食。また、余ったお米は希望する保護者に小分け販売するそうです。

*白鳥小では10月23日(金)に国本の皆さんの協力で、国本金蔵院の下、岡崎さん所有の畑で芋掘りが行われます。(佐久間里山通信員)

楽器挫折者救済合宿in月出小学校'09

来年もまた逢いましょう 観に来てね!

思えばこの合宿、結構雨に降られていた。2004年の第1回目でも早くも降られ、最終日のパーベキューは月出小のとなりにある鶴舞青年の家の体育館の下が会場だった。去年も最終日雨が降られ、大根杏の木陰でパーベキューはかなわず校舎入り口でおこなった。今年こそは、と意気込んだものの結局雨のパーベキューだった。しかし、翌日台風が襲来したことを思えば「ついてた」といえるかもしれない。

6回目となる今年の合宿も、8月28・30日という夏休み大詰め開催にもかかわらず、募集開始後程なくして売切れ。途中、キャンセルが出て再募集をすぐに満員にという好評振り。月出のリヒター4人を含む15人のうち、最も近い人は千葉市中央区から、遠方は奈良県京都市、兵庫県と関西からそれぞれ一人ずつ。

一昨年は特別講師に種ともこさんと、去年は雑誌の取材で西原理恵子さんが参加したが、今回は特別企画なしの「素の合宿」となつた。

さて、今回担当の「わく」が参加することになったバンドの課題曲は、懐かしなベイシテイロライズ「SATURDAY NIGHT」だった。

譜面をもらい、二日目のバンド練習から参加した。編成は女性A(Avby)、女性B(BorB)、女性C(CDs)、男性A(A)、担当B(B)の5人だ。バンド練習は、発表会に登場する4バンドが3階の音楽室で交互におこなう。その間きりばやし講師は休み無しだ。

加茂伝説募集!

地域の皆さんに、そして後世に残したい「加茂ならでは」の話や出来事をお寄せ下さい。

特においちゃん、おばあちゃんの話など大歓迎です。どんな小さな事でも結構です。お待ちしています。

情報提供・取材依頼はお近くの通信員へメールでも受け付けます。

尚、紙面及び記事に関するご意見・お問い合わせは、市原商工会議所 市原市五井中央西1-2-25 担当 北米 E-mailアドレス: kias@od.or.jp URL: http://www.yo-ro-kadoya.co.jp/kansai_rebubu

次回新年号は1月20日発行予定です

